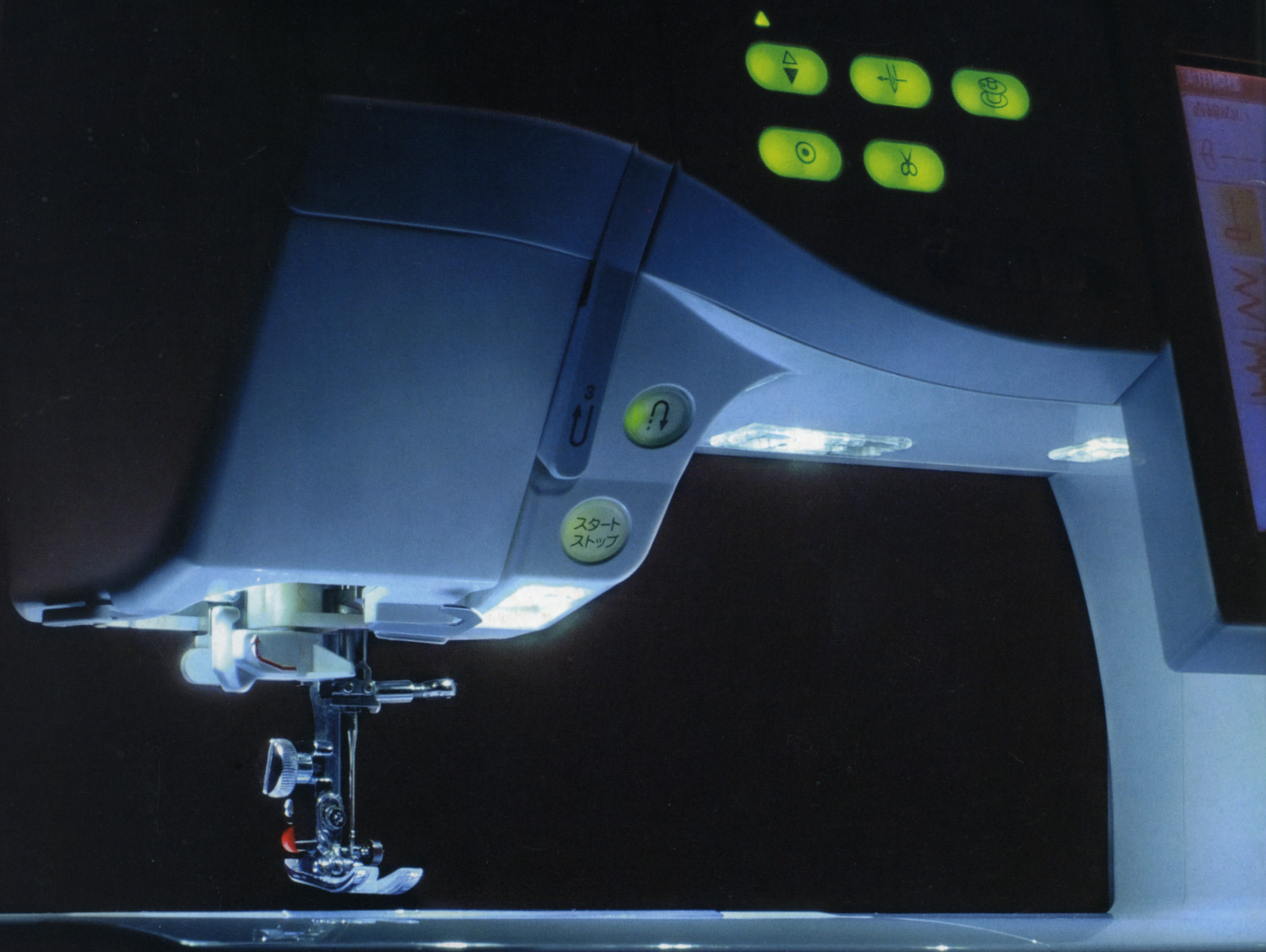


[ザ・ネイバー]

THE

# Neighbor ②

VOL.396 FEBRUARY 2007



特集

身近な廃材 意外な使い道——

**巻を席捲するリサイクル商品**

## CONTENTS

- 8 ■巻頭対談  
**モノづくりの時代 (Part 3)**  
ゲスト/小関 智弘さん・吉田 忠裕さん
- 14 ■特集  
**身近な廃材 意外な使い道——  
巷を席捲するリサイクル商品**
- 24 ■独立独歩挑戦のすすめ 橋本 肇  
**コウモリの生態**
- 4 ■アウトドア達人列伝(152) 工藤 やよいさん  
**完成してからも進化し深みを増していくのが「葉画」です**
- 63 ■歳時記 松原 巖樹  
**小雪のあとに『ツグミ』**
- 53 ■カラー・グラビア/モノ・そのデザイン・インの変遷<152>  
**世界シェア「No.1」のトップリーダー  
蛇の目ミシン工業(株)の<家庭用ミシン>**
- 20 ■HIGH TECH 大人の学習塾/下野 宏  
**「MNP」がもたらす余波**
- 28 ■拝聴拝見レポート 白神 洋子  
**コンクリートに「革命」を起こした次世代コンクリート「ダクトル」「ダクトルAF」**
- 18 ■Dr.レポート/カラダ研究室 井口 傑  
**靴医学**
- 32 ■私流私考(2)  
○夢の実現の一步 挾土 秀平  
○博多織デベロップメントカレッジ 鷺海 伸夫  
○梅にうぐいす 金塚 晴子
- 40 ■ウチのやり方(354) 村上 康成  
**親もひとりの人間に戻って、ワクワクドキドキ。家族で過ごす水辺のキャンプ**
- 44 ■HOBBY入門  
**野口体操**
- 48 ■新研究シリーズ  
**パック旅行利用術**
- 60 ■?!探偵局  
**温度計の摂氏、華氏とは何のこと? その由来を教えてください**
- 36 ■ビジネスミニ情報  
58 ■NEWS PICKUP  
62 ■記念日<銀閣寺の日>

[ザ・ネイバー]  
THE  
Neighbor

Vol.396

2

February 2007

Medical Study for Footwear すなわち「履き物に関する医学研究」が日本靴医学会で定めた「靴医学」の英訳である。日本靴医学会が創立されて二〇年になるが、それ以前に日本に「靴医学」なる言葉はなかった。確かめたわけではないが、世界にも類を見ない用語である。

日本靴医学会の創立メンバーのひとりである石塚忠雄先生は当時を回想して、「米国留学で足医学を学んで、日本でも生活の洋風化、女性の社会進出により、四六時中靴を履くようになったのに、靴に対する医学的研究がまったくないことを危惧した。日本でも足の外科学会は既にあったが、足の外科の研究が進み上手に治療を行っても、その後の生活に欠かせない足にフィットした靴をみつめることは非常に困難であった。かかる状況から靴を医学的観点から研究する必要性を痛感し、整形外科医の同志を募り日本靴医学会を創設した」と、語っている。

当時は、靴を「つくる」、「売る」、「選ぶ」、「買う」の何れの過程でも、医師が、

## 万物の霊長——人間を支える足

# 靴医学

③

医学が、関与することはなかった。もちろん、靴型装具は義肢装具として整形外科やリハビリの重要な治療手段であり、医学的研究も長年精力的に行われてきた。しかし、ここで注目されたのは「普通の靴」であり、footwear 履き物、足の衣服であって、footbrace 足の装具でもfootgear スポーツや仕事のための道具ではなかった。大量生産され、店先に並べられて、一般の消費者に買われていく普通の靴の健康に対する影響に、医学的な研究が必要であるとした所に先見性がある。石塚先生は創立当時の、マスクミから官庁までの広い熱狂的な社会的反響に驚き、かつ慌てたと述べている。

靴医学とよく対比される足の外科、足

医学は解剖、生理から、病理、手術まで医学の世界で完結する。しかし、靴医学の半分を構成する靴に対して医者は無知といわざるを得ない。医者以外に、靴を設計し、作製し、売買し、消費するすべてのレベルにおける専門家、研究者の関与が必要となる。従って、靴医学会には、医者はかりでなく、靴の製造業、販売に携わる人々から、消費者の立場の人まで、工学から教育まで、非常に広い分野の会員が所属している。そのうえ、足に関する医療をすべて扱うはずの足医学が、たまたま「足の外科」と称したため、足底挿板や治療靴など足の装具による保存療法も扱うようになり、義肢装具士や理学療法士の参加も盛んである。一方では、

スポーツ医学の分野からのアプローチも盛んになり、はじめは wear に限られていた靴医学も brace や gear としての靴も扱うようになり、靴医学の範囲は拡大の一途を辿っている。

二〇年前に「病気になる靴、健康を損なわない靴」でスタートした靴医学の現在のテーマは、「病気が治る靴、健康になる靴」にまで拡大、前進している。先達の努力により、外反母趾や槌趾に見られるハイヒールの弊害は、一般にもよく知られるようになった。お陰で先端に穴が開いたり、踵がすっぽ抜けたりするズックを履いた子どもも見かけなくなつた。お年寄りにもコンフォート・シューズが流行で、紐靴への抵抗も少なくなつている。新しい材料、製法、設計により、靴によって糖尿病による足の潰瘍を治療し、運動による膝への障害を防止することが可能な時代になってきた。靴に対する科学、医学の学問的関与がより必要とされつつある。

靴はその成り立ちから、衣服や帽子と同様のファッション性を内在している。

従って、美しく格好よくなければ売れない。ハイヒールの害をいくら医学的に証明しても、ハイヒールが美しい間はなくなり、足によい靴をつくっても醜ければ売れない。しかし、美醜は感覚だから、流行により変化し得る。健康志向は最近の大きな流れであり、健康であることは格好のよさになってきた。そのお陰で、コンフォート・シューズというジャンルが形成され、紐靴、足によい形の靴が女性にも受け入れてきた。また、スポーツ志向からスニーカーが若者を中心に拡がり、ズックか安手の革靴しかなかったジャンルに選択肢の幅を広げた。足を保護する健康志向、機能を高めるスポーツ志向は何れも足には喜ばしいことだが、健康志向、スポーツ志向の両方にファッション性が見え隠れし、靴医学からは憂慮せざるを得ない面がある。

歩きやすいウオーキング・シューズ、走りやすいランニング・シューズが店頭にあふれ、多くの消費者の購買意欲をかき立てている。メーカーが機能を向上させる靴を開発すること自体は素晴らしい



ことで靴医学からも大歓迎である。しかし、靴のファッション性につけ込んで機能を単なる宣伝文句として並べ立てるとしか見えない物も多い。靴医学会の発表にも、たった数人の被験者からの主観的な評価から機能の向上を唱っている論文も少なくないが、まったく根拠がないよりましである。

靴の健康に対する重要性に鑑み、ややもするとファッションの世界におぼれる靴に、医学のメスを入れていきたい。

ホームページ  
井口 傑 <http://web.sc.ic.keio.ac.jp/inokuchi>  
足の外科 <http://www.jssf.jp>  
靴医学 <http://www.kutsuigaku.com>